



オフィスを「行くべき場所」から「行きたい場所」へ ～Withコロナ時代におけるオフィスのあるべき姿を考える～

関西支部では、約3年ぶりとなる対面型イベント「Withコロナ下での働く環境を考える」を9月2日(金)に開催。コロナ禍を受けて大きく変化するオフィスのあり方について、関西支部の副支部長を務めるコクヨ株式会社様の取り組み紹介やオフィス見学を実施しました。イベントの様様や狙い、その成果について紹介します。

Profile

コクヨ株式会社 様

1905年の創業以来、117年の歴史を持つコクヨは、一人ひとりのお客様が前向きに新しい変化に向き合っていけるようなワークスタイルやライフスタイルを提案していくことで社会全体をワクワクさせていく。それこそが大事な使命と考えています。2021年に発表した新たな企業理念「be Unique.」には、商品・サービスの提供を通じてお客様の創造性を刺激し、お客様一人ひとりの個性を輝かせたい、との思いが込められています。



●ハイブリッドワークの普及とともに見直されるオフィスの役割

近年のコロナ禍は、テレワークに象徴されるニューノーマルな働き方を一気に普及させ、「働き方改革」を急加速させました。コロナとの共生が模索される「Withコロナ」の社会では、オフィスだけでなく自宅やコワーキングスペースなど、多様なワークプレイスを使い分ける「ハイブリッドワーク」が広がっており、働く人々の価値観にも変化をもたらしています。

「オフィス家具を軸に、理想の働き方を追求・提案するコクヨでは、昨今の環境や意識の変化を踏まえ、お客様により効率的な働き方を提案する一方で、そこから新たな課題も生まれています。1つは、従業員同士のリアルなコミュニケーション機会の減少により、イノベーションの創出力が低下すること。もう1つは、組織の分散化や人材の流動化により、企業の求心力が低下すること。これらの課題を解決するため、これからのオフィスには、ワークプレイスの1つではなく、“ビジョンを共有し、共感する場”としての機能が求められます」と講師の水野さんは語ります。「コロナ禍前は“行くべき場所”であったオフィスを“行きたい場所”にすることが大切」との言葉に、参加者は強く共感していました。



ライブオフィス・ショールーム見学

●Withコロナ時代に求められる新しい働き方「ABW」とは

Withコロナ社会の新たな働き方として、コクヨ様が実践、提案するのが「ABW(アクティビティ・ベースド・ワーキング)」。時間と場所を自由に選択できる働き方のことで、もともとはオランダが発祥ですが、近年、モバイルツールの発達とともに世界中に広がりつつあります(図参照)。

ABWのポイントは、目の前の仕事に対し「いつ・どの場所でやるのが最も効率的か」を働く人が自ら考え、決定することにあります。それゆえ、従業員一人ひとりに自律性が養われるとともに、業務効率や社員満足度が向上。ワークライフバランスが改善されてストレスも軽減できます。経営層から見ても、従業員のスキルアップ、優秀な人材の獲得や定着が期待でき、また、ファシリティコストの削減にもつながります。

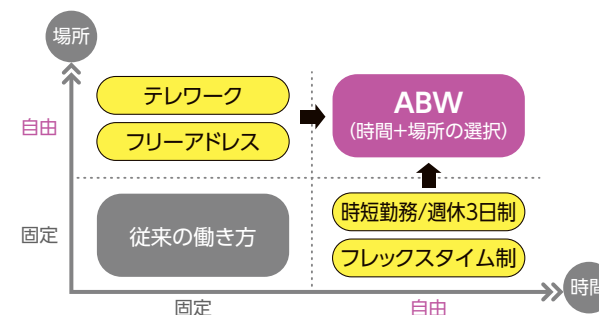


図)ABW(Activity Based Working)の定義
出典:コクヨ様「WORK TRANSFORMATION コンセプトブック Vol.2」

● 自ら試行錯誤した成果を「ライブオフィス」として公開

コクヨ様では、このABWをコロナ禍以前の2018年から自社オフィスに導入し、試行錯誤を重ねながら、そのメリットを最大化する制度や運用方法を検討。その成果を「ライブオフィス」として公開しており、今回のイベントでも「梅田ライブオフィス」の見学会を実施しました。

密を避けるため少人数ずつに分かれて行われた見学会では、完全フリーアドレスのワークエリアやWeb会議専用エリア、プロジェクトワーク専用エリアなど、機能別に区画されたワーキングスペースと、カフェやリラクスペース、オフィス内テントといったコミュニケーションスポットを体感。まさに「ここでしか体験できない特別な時間」を提供するオフィスに、見学者から驚きの声が上がリ、熱心に質問を重ねるうちに「こんなオフィスで働いてみたい」「仕事を効率化するヒントが得られた」など、前向きな声が増えていきました。

続けて見学したショールームでは、ABWを実現するための高機能なオフィス家具類を体感でき、見学後は「早速、上司に打診してみよう」と言った声も聞かれるほど。参加者一人ひとりが対面イベントならではの成果を実感していました。



コクヨ様「梅田ライブオフィス」

- A** 入社した従業員は必ず通過する構造により、偶発的なコミュニケーションを促す **リビングエリア**
- B** 設計・デザイン担当者がリアルな素材や図面に触れながら働く **アトリエ**
- C** チーム単位でのコミュニケーションを活性化させる **プロジェクトワーキングエリア**
- D** 防音性などに配慮したWebミーティングのための **Webエリア**

● 理想のオフィスづくりに向けたコクヨ様の想い

イベント終了後、コクヨ様のご担当者お2人にお話を伺いました。関西方面でマーケティングを推進する木原さんは、「日本人は変化に対して腰が重い傾向がありますが、私たちコクヨは世間よりも一歩早く変化を先取りし、自らトライアルした結果を、失敗も含めてお客様に紹介することで、より良いオフィスづくりをお手伝いしてきました。ただオフィス家具を提供して終わりではなく、お客様にとっての理想のオフィスを一緒になって実現するのが、コクヨの事業スタンスです」と語ります。

当日の講師を務められた水野さんは、「ライブオフィスという取り組みは、約半世紀前の1969年から実施しているもの。現在は日本全国のオフィスで実施していますので、オフィスのあり方を見直したいという方には、ぜひ、一度見ていただければと思います。実際に働いているコクヨ社員の姿を見ることで、何らかの“気づき”が得られるはずです」と語りました。

ライブオフィスの詳細はコクヨ様ホームページに掲載されていますので、今回の記事に興味を持たれた方は、ぜひご参照ください。



大阪・奈良・京都を結ぶ、くつろぎの歴史旅へ
観光特急「あをによし」



日本の歴史や文化、食の楽しみにあふれる三都、大阪・奈良・京都を乗り換えなしで結ぶ近鉄の観光特急「あをによし」。正倉院の宝物をモチーフにした、天平文様などをデザインに取り入れています。車窓の風景が楽しめるゆったりとした座席で、いにしへの歴史に思いを馳せる旅へ、お出かけしませんか。



1・3・4号車 ツインシート



2号車 サロンシート

Interviewee



コクヨ株式会社
ファニチャー事業本部
販売マーケティング部
法人第2グループ 担当課長
木原 青氏



コクヨ株式会社
ファニチャー事業本部
関西営業本部 関西営業部
第1グループ
水野 陽介氏

FUJITSU ファミリー会関西支部

Tel 06-6920-5849 (直通)
メール contact-family-kansai@cs.jp.fujitsu.com



ハイブリッド形式で開催された第1回中間発表



若手のアイデアを身近な課題解決に活かす ～ローコード・ノーコード開発による実践的な“学び”を提供～

北陸支部では、若手会員を対象とした分科会「Tech Lab」を9月からスタートさせました。この分科会は、近年、注目が集まるローコード・ノーコード開発に触れながら、課題解決に向けた新たなサービスを生み出すプロセスを学ぶものです。来年2月の成果発表に向けて、活発な活動が続いている分科会についてレポートします。

●ローコード・ノーコード開発がもたらす、誰もがサービス開発に関われる時代

近年、注目される「ローコード・ノーコード開発」とは、システムやアプリの開発に不可欠とされていた「コード」を書くための専門的な知識・スキルを必要としない開発手法のこと。開発ツールを活用することで、あらかじめ準備されている部品やテンプレートをマウス操作などで組み合わせるだけで、容易に開発できます。

そのメリットは、開発効率の向上はもちろん、IT部門など専門チームだけでなく社内の誰もが開発に参画できること。「この手法を用いることで、若手社員のアイデアを、地域の身近な課題解決につながるサービス開発に活かさないだろうか」幹事会で出たこうした声が、分科会開催のきっかけとなりました。

開催に向けた検討を進める中で、支部長から「技術だけでなく、エンドユーザーに視野を広げて、日々、どんなことに悩みや不満を抱えているのか、課題感を捉えることを重視してほしい」とのご意見をいただきました。そこで、開発ツールを使った技術講習よりも「課題の発見

や解決策を立案するプロセス」を重視した分科会となるよう、プログラムの具体案を練りました。

●参加者が「業務や生活の中で感じている課題」をテーマに

こうして立案されたプログラムは、2022年9月から翌年2月まで、約半年間に及ぶもの（図参照）。参加者は2度のワークショップを通じて、課題解決のプロセスやローコード・ノーコード開発ツールの使い方を学び、チーム単位で設定した課題を解決するためのアプリ開発に挑戦します。

ポイントは、2度にわたる中間報告会を設定したこと。最初の報告会は、各チームが注目した課題や、その解決に向けた考え方、課題解決につながるアプリのプロトタイプを発表する場であると同時に、出席した上司や会員幹事とともに「どうやったらもっと良いサービスになるか」を考える場とします。参加者はそこで得たフィードバ

ックを持ち帰り、2度目の中間報告会までに議論を重ねた上で、改善を加えます。こうしたプロセスを踏むことで、多様な立場・視点からの指摘による“気づき”や、試作と改善を繰り返す重要性を、参加者に学んでいただく狙いがあります。

●多様な地域・業種の参加者が切磋琢磨し、刺激を与え合う場に

「Tech Lab」の開催に当たり、もう1つ重視したのが、多様な価値観を取り入れた場にすること。そのため地域も近い信越支部と共同開催とする運びとなりました。

開催前は少なからず不安もありました。専門知識が不要なローコード・ノーコード開発とはいえ、若手社員だけでアプリを開発する講習会は、ファミリー会としても初めての試みだけに、どうしても敷居が高く感じられるのではと懸念していたのです。

ところが、フタを開けてみれば、地域はもちろん、業

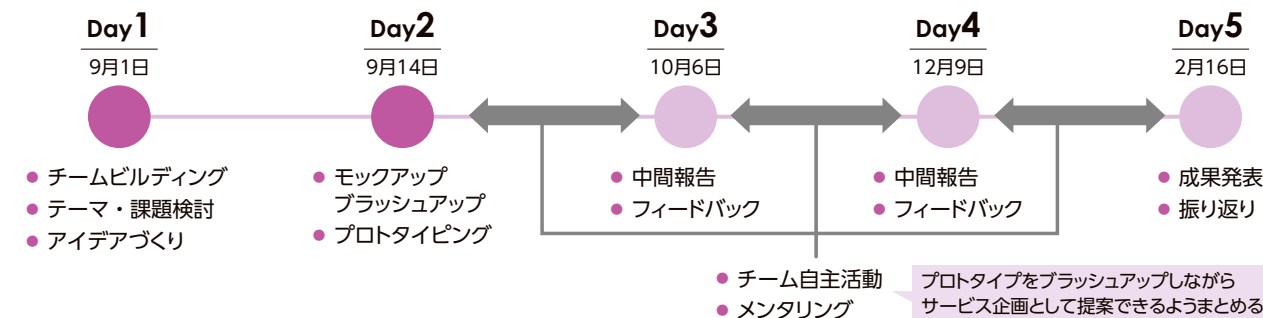


図)「Tech Lab」開催フロー/スケジュール

界や規模も多種多様な企業から、想定以上の参加者に集まっただけでした。中には地域の中核企業でDXを担当している方もいて、その方の「非常に有意義な機会だと思うので、ぜひ継続的に開催してほしい」との声に、後押しされる思いでした。

●メンバー同士が持ち寄った課題をもとに、活発な議論と交流を重ねる

「Tech Lab」では、サブタイトルに「あなたの身近な課題 作って学んで解決しよう」とあるように、参加者自身が日々、感じている身近な課題や困りごとを持ち寄っていただき、そこからチーム単位で取り組むべきテーマを設定しました。

9月1日に開催された第1回ワークショップでは、4つのstepでサービス内容を検討しました。

step1はメンバー同士が互いを知るための自己紹介からスタート。事前に用意してきた「自分はどんな人なのか、何を大切にしているのか」について、参加者同士の対話を通じて紐解いていきました。

step2では、お互いの大切にしたいことを掛け合わせて「どんな未来を創りたいか」、その未来を実現する中で、「誰のために、どう役立っていたいか」を考察。

step3では、理想の未来が実現できていない現状に目を向け、解決すべき課題を設定しました。

最後のstep4において解決すべき課題について、どのようなサービスアイデアがあるか、さらに深掘りして、各チームのサービス内容を決定しました。

続けて、9月14日に開催された第2回ワークショップでは、前回のアイデアをベースに課題を整理しながらブラッシュアップするとともに、ローコード開発プラットフォーム「PowerApps」を使ってアプリのプロトタイプを作成しました。

2回にわたるワークショップは、いずれもオンライン開催にも関わらず、若手ならではの対応力で、複数のツールを難なく使いこなしていました。全員が初対面のため、当初は硬さも見られたものの、自己紹介を通じてお互いの考えや思いを引き出すワークに重きを置いた甲斐あって、次第に和気藹々とした雰囲気。「対話しよう」「素直に伝えよう」「楽しもう」をグランドルールに掲げ、活発な議論を促したことで、楽しみながら課題解決に取り組む姿勢が見られ、運営側としても大きな手応えを感じています。

今後は中間報告、成果発表に向けて、チーム単位で月に数回の活動を続けていきます。

10月の中間報告会は、対面も含めたハイブリッドで開催しました。こうした機会を通じて各チームの連携がさらに強化され、いずれメンバー同士による本格的な異業種交流につながることを期待しています。



コミュニケーションツールを駆使した活発な議論が行われました

Voices

（参加メンバーの感想） （第2回ワークショップ終了時点）

- 初めて触れた「PowerApps」は非常に可能性を感じるツールでした。今後の業務に役立てたいですね。
- 多様なメンバーが参加して、新しい発想に触れる良い経験ができました。

次代を育み未来を創る

「金沢未来のまち創造館」

ここでは、「スタートアップ・新ビジネス創出」、「子供の独創力育成」、「食の価値創造」を柱に事業活動を展開し、金沢市における新たな産業の創出と未来で活躍する人材の輩出を図っています。

中でも、子供たちの可能性を信じ、最大限に引き出すための「クリエイティブ・フィールド：VIVISTOP」では、子供たちのアイデアを実現するための多様な機材やツール、素材の揃った環境で、アートやテクノロジーを活用し、世界各国にいる多様な人たちと共創しながら、子供たちが自分の可能性を楽しみ、未来を創っていくためのサポートをしています。

■金沢未来のまち創造館

<https://www.mirai-nomachi.jp/>

■「究極のカレー」

プロジェクト:1年間、失敗や研究を重ねて、3日間限定のカレー店をオープン。
<https://kanazawa.vivita.club/>



- 作成したいアプリはイメージできても、実際にカタチにする難しさを実感しました。
- 頭を使う場面が多かったものの、グループの雰囲気が良く、楽しく打ち合わせができました。
- ツールを使って簡単に開発できるものの、作り込もうとするとなかなか難しい。サービス開発の奥深さが実感できました。



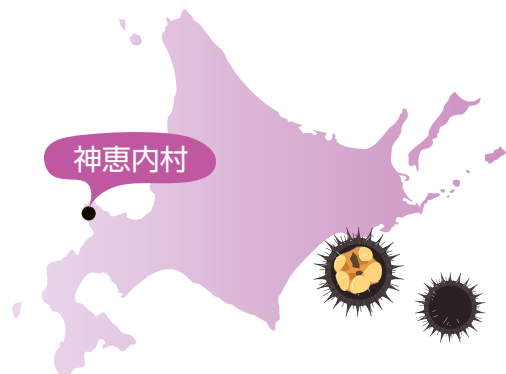
ワーケーションやワークショップで地域に活気を注入 小さな漁村で、陸上養殖に次ぐ新たな地域活性化策が始まっています

ウニの陸上養殖の実現に向けた取り組みで注目される北海道神恵内村では、ワーケーションや、企業と村民が一体となったワークショップの開催など、新たな地域活性化への取り組みを推進しています。地域の課題解決と、村民の生活・意識の変革へ向けた取り組みをご紹介します。

Profile

北海道古宇郡神恵内村 様

北海道神恵内村は、積丹半島西側中央部に位置する、道内で2番目に人口が少ない村です。神恵内(カモエナイ)はアイヌ語で『美しい神の沢』の意味で、迫りくる山と青い海が美しく、昔からウニ、ナマコの収穫を主要産業としてきました。近年は、漁業従事者の高齢化と担い手不足でウニの収穫が落ち込みましたが、ウニの陸上養殖の実現に向けた取り組みで一躍有名になりました。



●憩いの場「温泉施設」の閉鎖で 浮き彫りになった課題

神恵内村では、村営の温泉施設が村民の憩いの場になっていましたが、設備の老朽化により閉鎖され、代わりとなる施設もなく、村民同士のコミュニケーションが少なくなっていました。また、隣の村には温泉施設や大型店舗などありますが、バスの本数が少なく、高齢世帯が多いことから、車での移動が簡単にできないことも課題でした。

●ワーケーションとワークショップの 同時開催で課題に取り組む

村民同士のコミュニケーション不足や地域交通の整備といった課題を受け、神恵内村は新たな取り組みを始めました。その1つが、ワーケーション体験プランに企

業を誘致し、ワーケーションに参加した方々と村民が一緒になってワークショップを行い、課題解決のヒントを探るチャレンジです。

今回取材したのは2期目のワーケーションモニターツアーで、富士通Japanから総勢14名のメンバーが1週間の予定で参加していました。到着後、車で村を案内し、夜はコワーキングスペースで村民と一緒に「交流・コミュニティ×脱炭素」をテーマとするワークショップが行われました。

神恵内村は、2050年までにゼロカーボンを目指しており、まずは村民の皆さんに意識を持ってもらう、知ってもらうことが大事ということで、村の課題と脱炭素を組み合わせたテーマでワークショップを行ってきました。これまでは、行政やコンサルタントが主導して進めてきましたが、今では、住民の方々が小さなことから取り組んでいくというボトムアップに変わってきています。



ワーケーションメンバーと村民が一体となってワークショップに参加



熱心にタブレット操作説明会に取り組む村民の皆さん

ICTを活用する地域コミュニティの新しいカタチ

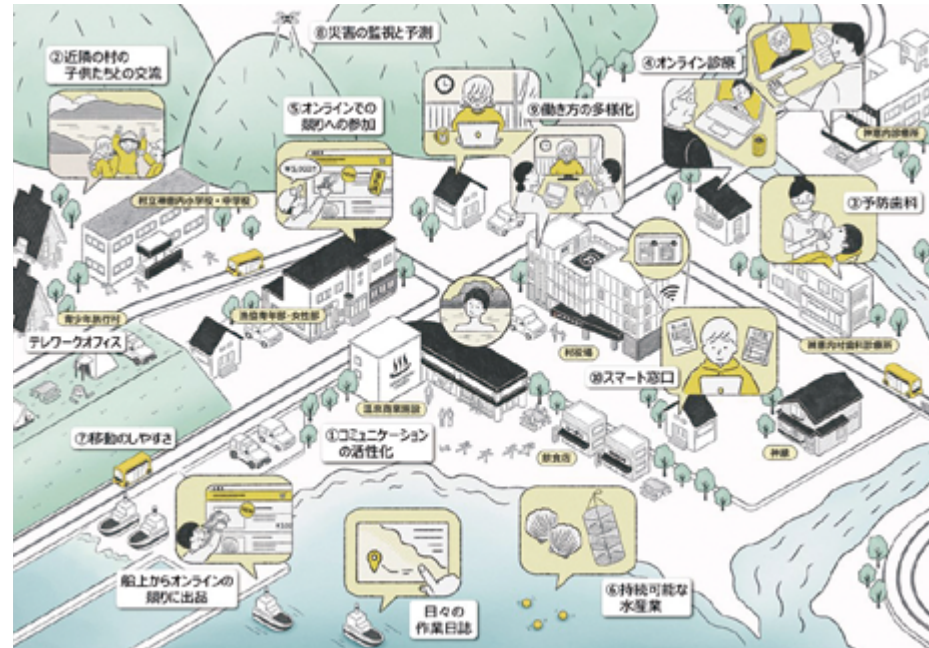
村民同士のコミュニケーション不足については、新たにタブレット端末を導入する「かもえないチャンネル」の実証実験を開始しました。体調アンケートによるデジタル見守り機能や、村の出来事をすぐに共有できる機能などに加えて、神恵内村ならではの機能として、漁師さんにその日余った魚を分けてもらう「魚をもらいたい」ボタンが付いています。獲りたての新鮮な魚をムダにすることなく、欲しい人のところに届けることができる、まさに、SDGsにつながる取り組みだと感じました。

村役場での操作説明会では、多くの村民の方が実際にタブレットを操作しながら、タブレットによるコミュニケーションを体験していました。

持続可能な地域社会へ 神恵内村が目指す、未来のありたい姿とは

神恵内村には、今回取り組みを始めたコミュニケーションの課題以外にも、交通、教育、医療、行政など、日本の限界集落共通の様々な課題があります。村民の声を取り入れて最新のICT技術を活用した各分野のビジョンマップを富士通Japanで作成、提案を行い、今後も積極的に新たな分野の課題解決に取り組んでいく予定です。

今後の取り組みの1つとして、余った魚やこれまで地元以外に流通していなかった魚を村民以外の方が購入できる仕組みを作りたいとのこと。村民とともに前進する神恵内村のネクストアクションに、ぜひ注目してください。



富士通 Japan が提案した神恵内村が目指す姿(ビジョンマップ)

丘のまちとして 「日本で最も美しい村・美瑛町」

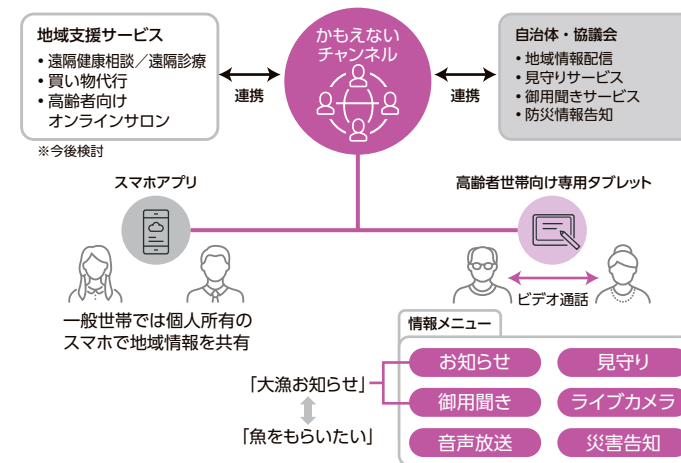
旭川駅から車で50分、旭川空港からであれば、車で30分という近さの美瑛町。地域に住む人たちがまちに誇りを持って充実した生活を送り、将来にわたって美しい地域を守り続けることで、訪れる観光客の皆様にも最高のおもてなしができる、ブランド力のある地域づくりを行っています。

11月の北海道はオフシーズンですが、こちらでは、11月から「白金青い池」のライトアップを行っています。様々な照明パターンにより、池と夜空の星、ちらつく雪、カラマツの影などが幻想的に浮かび上がり、夏の景色とは全く趣の異なる風景をお楽しみいただけます。



体が冷えたあとは、大雪山のふもと、白金温泉にも、ぜひお立ち寄りください。

美瑛の丘



かもえないチャンネル(地域の情報共有基盤)の概要